

朝待ちのゆめ

イチ

2, 充胡収奪

「奥さん、今日はいいブドウが入ってるよ、どうだい」

「今だけ大特価、ここで買わなきゃ損だよ」

「騙されたと思って試してみな、今回だけはお代はいらないよ」

宇克から南方に二十数キロ、充胡じゅうこの市場は相当に賑わっている。数年前に建てられたばかりのこの都は、旅商人の集まる商業の都だった。

さまざまな出自、さまざまな装束に身を包んだ人たちでごった返す目抜き通りの両側には露店が軒を連ね、古今東西のあらゆる雑貨が並べられている。

夢巫主は目新しさに辺りをきよろきよろして、一度などはザジとエリのふたりを見失いそうになったほどだった。夢巫主はエリの腰についた鞆をこっそり触れて、よそ見をしながら歩いてもはぐれないようにした。

五日前、夢巫主を突然連れ去った二人組は、御所の寢室で話したことを忘れてしまったかのようにふるまっている。自分をいやおうなしに巻き込んだのだから、しっ

かりとした計画を話してほしいと思ったが、夢巫主に話す気が無いのか、それとも計画自体存在しないのか、三人はのんびりと街道を歩いて充胡へたどり着き、そこでは全くただの観光客のようだった。

アヌの継ぎ桐は自分が誘拐されても、助けに来る者がいないであろうことは察しがついていた。今最も恐ろしいのは、この二人にまで見捨てられて右も左も分からない状況にただ一人取り残されることだ。宮殿を出て生活をしたことは一度も無かったのである。

籐籠や金細工、革製品などの手工業品の一角を抜け、観物や瓶詰の食料品などが並ぶ区画に入った。

夢巫主はそれらの中である屋台の陳列に目が吸い寄せられた。赤い飴が糸で軒先にぶら下がっているようであったが、まるで宝石のように陽光にきらめき、食べ物とは思えないほどに美しかった。

夢巫主の足は立ち止まり、その屋台のそばへ近寄っていった。ルビーのように澄んだ反射光がちらちらと頭上で揺らめき、テントの支柱や道路の石畳、夢巫主の顔に赤い光の欠片を投げかけている。

息をつめて見入っていた夢巫主の頭上から覗き込むようにして、背後からエリが声をかけた。

「根苺の飴ですね」

「きれいだな」

「はい。小さい頃は親によくねだったものです」

人ごみの中からいらいらしたザジの声が聞こえた気がしたが、エリはそれを無視してうつとりと眺めている。

「お前はここの出身なのか？」

「いえ、吊るし飴はどこにでも売っていますから」

「そうか」外にはこんな飴が売っているのか、と夢巫主は思った。

「何を油売っているんだ。置いていっちゃうところだったぞ」しびれを切らしたザジが二人の下に引き返してきて、いきなり夢巫主の肩を掴んだ。

心臓が縮み上がるほどに驚き、夢巫主は首をすくめた。殴られると思った。

「お、吊るし飴だ」

「ザジは飴が嫌いでしたね」

「嫌いじゃないよ、好きじゃないだけだ。おい、店主、二本だ」

ザジは店の奥に声をかけて代金を店先に置いてから、背伸びをして二つの飴を掛け金から外した。

ひとつはエリに、ひとつは夢巫主に渡す。

「これは……」

まさか買ってもらえるとは思っていなかったもので、夢巫主は受け取るかどうか少し迷った。エリは礼も言わず

に受け取ってさつきとかじりついている。

「根苺の飴ですよ。あんたは好きかもな」

不安は残るが、湧き上がる嬉しさを隠すことができず、夢巫主は吊るし飴を受け取った。期待に胸を膨らませてかじると、ねっとりとした甘みが舌を刺す。

「エリ、一口くれ。私も久しぶりに食べたい」

ザジはそう言ってエリの飴に横から食いついている。

「うん、やっぱり不味い」

確かに、甘さの中に独特な臭みがある、と夢巫主は思った。強烈な甘みで頭が痛くなりそうなほどであり、薬のような青臭さと一緒に、くどい味を水で流し込みたくなる。

「……そうだな。この飴はなかなか変わった味がする」

と夢巫主が言うと、ザジは嬉しそうに笑いかけた。

「だろ？ そうだよな！ ラテイジエリはこれが大好きなんだよ。味音痴なんだ」

「柔らかくておいしいじゃないですか」と不満げなエリ。

「はは、こいつはそうは思っていないみたいだぜ。おっと、私たちに寄るんじゃない。味音痴が坊主にうつっちまう……」

じゃれあいながら三人は再び歩き出した。買ってもらった飴をかじりながら、夢巫主はその甘みをかみしめていた。

*

「ラティジジエリ殿、私たちは今から充胡の聖王に謁見しに行くのか？」

少し調子の出てきた夢巫主が、横を歩くエリに声を低めて質問をした。

「エリでいいですよ」

「……エリ殿。何の準備もせず行くのは、その、無謀ではないのか」

エリは不安そうな夢巫主の顔を見て、どうも宇克の聖王——アヌの継ぎ桐は、エリとザジのやり方をうまく飲み込めていないようだと思った。先を歩く相棒に置いて行かれないように気を配りながら、エリは簡単に返答を返してやる。

「あなたの時もろくな計画なんて無かったし、それでも上手くいった。それに今回は宇克の聖王たるあなたがいるんですから、何とかなるでしょ」

「しかし、それではこのまま……」

「待って。フードをかぶって顔を隠して」人ごみの中に見知った、嫌な顔を見つけて、エリはとっさに夢巫主の

頭を伏せさせた。もう片方の手でザジの背を叩く。

「ザジ、見つけたかもしれない」

「ち、撒け^まそうか？」

「実をいうと、目が合ったと思います。きっと猊下の顔も見られた」

ザジはめんどくさそうに腰に手をやり、「こいつをそんな風と呼ぶな。何か適当な偽名をつけてやれ」と言い、「さっさと奴らに釘をさしちまおう。おい、お前はエリから離れるなよ」

こっくりと頷くことしかできない夢巫主をつれて、中央通りからわき道に入った。辺りはすうと静かになり、冷たい雰囲気^まが漂う。

「出て来いよ、飴が欲しいなら買ってやるぜ」

声をはりあげ虚空に叫ぶザジは路地の真ん中に立ち、エリと夢巫主は壁にびったりと背を付けて辺りを伺っている。

それに答えるかのように銀の閃きがその足元へ一直線、見ると一本の投げナイフだった。

ザジは地面に突き刺さったそのナイフを蹴り飛ばす。

「エリちゃんの懸賞金は昨日の晩に三ヶタに乗ったよ。」

なんでこんな急にと思つてたけど、その理由はさつき分かつちやつた」

純粹に、楽しげに、馴れ馴れしい調子で声は続く。しかしその主の姿は見えない。

「旦那ア、こつちに来て私に顔を見せてくれませんかね。相手が見えないのに会話するつてのは、どうも調子が出ませんでね」

「君はすぐ殴ってくるからいやだよ」

再びナイフが飛び、ひらりと身をかわしながらザジは壁ぎわに身を隠したエリに目配せをした。エリは小さくうなずくと、懐から拳銃を取り出し、射線から特定した方向に照準を合わせる。そして二発の銃声を路地裏に響かせた。

しかし手ごたえは無く、いらいらと二、三步脚を前に出したのち、はたと思ひ直してエリは後ろを振り返つた。

不安は的中し、端に立っていたはずの宇克の夢巫主は、少し目を離れたすきに影も形も無くなつてしまつてゐる。

「やられた！ そつちはおとりです！」

してやられたことにキレたザジは何ごとか吠えて、なりふり構わずに、パイプの張り巡らされた路地の側面に飛びついて屋根上に登つた。そして投げナイフのおとりを追つてあつという間に走り去つてしまふ。

静まり返つた路地裏に一人残されたエリはため息をつき、歩いてそこを出て行つた。アヌの継ぎ桐を連れては、そう遠くにも行けまい。

あせることなく、奪われた夢巫主をゆつくりと追うことにしよう。

*

宇克の夢巫主はここ数日の誘拐につぐ誘拐で、すっかり参つてしまつていた。怪しい二人組になかば強制的に連れ出され、今度はまた別の何者かに連れ去られた。思つてもみない状況に、アヌの継ぎ桐は自分の聖王としての立場を見失つてしまつた。

ナイフ使いと組んでゐるらしい相棒、路地の影から静かに現れ、助けを呼ぶ暇もなく夢巫主を連れ去つた豹紋の巫人は、何も言わずに夢巫主を抱えて裏通りを駆け抜ける。仮面に隠れた表情は分からない。

その腕の中でずいぶんと揺さぶられた夢巫主はもはや通つた道順もわからず、吐き気をこらえるのに必死だつた。

しばらくして、ある倉庫の中で突然その逃走劇は終わ

った。

「だ……誰だ？ 何の用だ？」

つい最近も同じことを言ったと思いつつも、口をついて出るのはいやなりこの言葉だった。返事は無い。

「あいつらとはどういう関係だ？ 何が目的で私を……」

「黙ってろ」

「し、しかし……」

有無をいわさぬ剣幕でにらみつけられ、夢巫主はふたたび縮み上がってしまった。ああ、聖王の冠が泣いている。臆病者の私は、野蛮な者たちにはいいように振り回されている。あまりの情けなさに、^{よわい} 齡十三の双ぼうが涙でにじむ。

と、肩を震わせ始めた幼い夢巫主を見て、誘拐犯はぎ

よつとして、おろおろと狼狽^{ろうばい}をはじめた。

「泣くな。おい、……頼むからやめてくれ」

乱暴につかまえていた夢巫主のそでを放し、夢巫主と視線を合わせるためにしゃがんだ誘拐犯は、仮面を外した。

「悪かった」

「わ……私は……私は……」

優しい気づかいに心の決壊がくずれ、夢巫主はしゃく

りあげる。

「私は……何が何だか分からない。私は何者だ？ 宇克の聖王猊下か、ただの泣き虫の子供か？ それとも……それとも……」

「俺にとつては六〇金だ。あいつらにとつては願いを叶える魔法の杖だろうな」

「お前は何者だ？」

「ただの賞金稼ぎだよ。あのジリスの巫人は軍でちよいとやらかして、五〇金の賞金首なんだが、俺らはそいつを追っているのさ。」

ただ、奴らがお前さんを誘拐したもんで賞金額がふくれあがって、少しあせってる」

「やらかした？」あの礼儀正しい巫人が、そんなことをするとは思えなかった。

「ああ。当時は俺も軍にいたんだが、ありやすごかったぜ。なんといつても……」

豹の巫人は夢巫主の顔に何か気づいたように、突如として口をつぐんだ。

「お前さん……『アヌの継ぎ桐』だよな？ その瞳、俺には黒く見えるんだが」

しまった。きつと、先ほど泣いてしまったからだ。

夢巫主は慌てて顔を伏せ、ごまかすための言葉をいう

いろとみつくろつたが、上手い言い訳は一向に思いつかない。

「……そうだ。私の瞳は黒い。私は夢見の才を偽っている。瞳を金で覆う方法があるんだよ、我が誘拐犯どの」

しばしの沈黙。

「あいつらは知らないんだな？ 誰にも知られていないんだな？」

こっくりと頷くと、「そうか」と考え込む様子。

「こうしよう、俺は何も見なかった。金さえ手に入ればそれでいいんだからな、俺も誰にも言わない。その代わりにお前さん、おとなしく連れ戻されてくれよ」

「私を殺さないのか？」

「金が手に入ればいいんだよ、大丈夫だ」

アヌの継ぎ桐はほっとして、懐から小瓶を取り出し、金のしずくを瞳に点した。目を閉じ、そして開くと、その両眼は夢巫主の証である金色に染まっている。

*

「今日という今日は許さねえ！ 野郎、ぶっ殺してやる」
積年の仇敵をあとという間に見失い、ザジは声の限りに吼えた。しかし、答える声は無い。完全に逃げられたようだ。

一人高空の風に吹かれて、ザジは行き場のない怒りに震えている。

切り札となる宇克の聖王を奪った賞金稼ぎどもに、護衛もできない無能極まりないエリに、そして何より、衝動的に突っ走ってまんまと掌の上で踊らされた馬鹿な自分自身に、腹が立ってしょうがなかった。

「ちくしょう、睨下を探しに行かないと」

後悔を重ねても何にもならないと、ザジは夢巫主の追跡を開始した。

エリをしつこくつけ狙う賞金稼ぎの二人組、林堂と

霞乃かすみのをつかまえるのには苦勞しそうだ。特に、夢巫主をかすめていったらしい豹の巫人の霞乃は身軽ですばしく、とてもザジが追い付けるとは思えなかった。

（まあ、あのお人よしの霞乃のことだ、夢巫主にうまく丸め込まれているかもしれないな）

ザジは人気のない場所をしらみつぶしに探し回りながら、夢巫主の賢しい口調を好ましく思い返した。そして自分からしくもなく、樂觀的になつていると感じた。まるでエリみたいだ。少し長く一緒にいすぎただろうか。

八年前に出会い、そのまま行動を共にしているジリスの巫人は、初めのころのよそよそしさはつゆと消え、ずいぶんと凶々しくなつた。

賞金稼ぎに追われて泥水の中を逃げ回っていた汚い巫人が、それなりに名が知られている軍人であつたということに気が付いて、ザジはこれ幸いと自分の計画に引き込んだのだ。まさかやつが敵が自分の敵になり、更には宇克の聖王を奪いにくるとは。

いろいろな思案していると、とある倉庫から人の話し声が漏れているのを耳にした。

「——その代わりにお前さん……」
「私を……いのか？」

見つけた。間違ひなく、霞乃と夢巫主だ。潜伏中にも低めずにべらべらと話し続けているとは、霞乃もしよせん軍隊上がりだ。ともかく、相手がどんなに足が速くとも、奇襲をかければ関係ない。

ザジはその倉庫の外周をぐるりと回り、話し込む彼らの死角から屋内に忍び込む。見てろよ、やり返してやる。

「新しいお友達ができたみてえだな、霞乃の旦那」

声をかけるや否や、ザジは霞乃の背中を蹴り飛ばし、そのまま馬乗りになつて顔面を一、二発殴りつけた。

「うわ。ザジ、てめえ……」

さしてダメージも負っていないような霞乃に難なくはねつけられ、ザジは舌打ちをした。まったく、巫人どもは脳筋で腹が立つ。

奇襲が成功したとはいへ、体格差に劣るザジはあつさりとおぶしをおさめた。ぼんやり突っ立っていた夢巫主の腕をひつつかんでひきよせる。

「巫主さん、無事か？」

宇克の聖王は顔を真っ青にして、何も言わず目を泳がせている。仕方なく巫主を抱きかかえ、ザジは倉庫の出口へと走り出した。

「お前さん、死にたくないなら何も言うなよ！」

後ろから追いかけてくる霞乃の声を振り切るように、ザジはそのまま入り組んだ下水道へ飛び込んだ。やつらはここまでは追いかけて来まい。

静かな暗やみに、水音がこだまする。混乱しているのか黙ったままの夢巫主を落ち着かせようと、ザジは努めて冷静に声をかけた。

「何を聞いた」

夢巫主はびくりと肩を震わせ、しかし何も言わない。

「大丈夫ですよ、霞乃のやつにあんたを殺させはしない」

「……」

「やつの口封じなんて気にするな。どうせ人を殺すようなタマじゃないんだ、あいつとエリは違う」

「……なにも。エリ殿は賞金首だ、と」

「それだけ？」

夢巫主はこっくりと頷く。釈然としないものの、これ以上追及しても仕方がないと思い、ザジは話を変えた。

「猥下、考えたんですがね、これからはあんたに身分を偽ってほしいんですよ。あんたに夢見の才があることを、他の人間に知られたくない。どうです、ラロ、とお呼びしてもよろしいですか」

「……」

「良かった。では、あなたは今から『アヌの継ぎ桐』ではなく、ただのラロだ。

この道をしばらく行ったら芥子窟けしの地下に繋がって

る。エリのやつを探すなら、まずはそこだ。どうせそこで管を巻いてるに違いないからな。悪いがラロ、付き合ってもらうぜ」

ザジとラロは下水道を歩いていったが、それきり黙ったままだった。